

平成15年度特別講演要旨

平成16年

◎1月28日

岡倉天心と小山正太郎

清水多吉

天心岡倉覚三への私の関心は、元本学国文学科教授浅野晃氏の仕事に触発されて以来のものです。浅野晃氏は天心のある側面を一方的に肥大化させたのではないか、という思いが当時からありました。他方、ドイツ哲学を専攻する私としては、近代日本の思想界にどのようにドイツ観念論が導入されたのかという点については、日頃、職業的関心を持ち続けていました。こうして明治11年来日のフェノロサにぶつかりました。フェノロサは、今日残されている資料から見ると、ヘーゲルの「美学」を中心にして講義をしました。美の理念は各民族精神を通して発露されるというヘーゲル「美学」の実践者が、彼の講義の第一回学生であった岡倉覚三でした。覚三は、その後、法隆寺をはじめとする関西古社寺の調査、狩野芳崖を見出し、横山大観らを弟子として持つなどの教育活動を通して、「美的ナショナリスト」としての位置を確立して行きます。ですが、彼の「美的ナショナリズム」は、あの「アジアは一つ」論を通して、やがて「政治的ナショナリズム」に転化されて行きます。もともとこの「アジアは一つ」論は、インド・アジャンターの石窟美術も、中国・敦煌の石窟美術も、ここ大和の法隆寺の美術の中で一つになっているのではないか、という意味であったのです。

このように覚三が「美的ナショナリスト」として、己れを確立するまでの彼の心の軌跡を追ってみようというのが、私の報告の中心です。ですが、

少なくとも彼が東京美術学校（現・芸大）の校長になる明治23年頃までの、彼にまつわる資料は多くありません。多くの研究者に依る資料が、子息一雄の手になる『父・天心』です。ですが、これは覚三死後26年（昭和14年）もたって刊行されたものであり、誇張もあれば、ボカシもあります。そこで覚三の心の軌跡を追うに当たって、終生のライバルとなる小山正太郎をぶつけて見ようと思います。

覚三と正太郎とは、まさに非対照的な人生を歩み、対極的な芸術観を貫いた人物でした。覚三は横浜生れですが、父勘右衛門は越前福井藩前藩主松平春嶽のおぼえ目出度い人物でした。開港地横浜で福井物産を取り扱う裕福な商家でしたので、覚三は少年時代から政治家、文化人に囲まれた生活をし、人もうらやむ教養を身につけ、エリートの道を歩みます。しかし、幕末維新期、越前福井藩は尾張名古屋藩とともに、江戸の町民からは白眼視されていました。「性悪だねえ——尾越薩長土」と囃したてる「ザレ歌」が江戸ではやっていた記録が残されています。春嶽はかつて幕府の総裁職まで勤めていながら、新政府の議定になり、東征軍として長岡攻撃に出兵していたからです。福井藩の江戸での評判の悪さは、父勘右衛門にとっては頭痛の種だったでしょう。何せ彼の一大商圏は江戸であったからです。藩の裏切り？ 七才の覚三にとってそのことの意味がわからなかったはずはありません。正太郎は福井藩に踏みにじられた長岡藩士の子でした。貧困と苦学の末、工部省付属美術学校のフォンタネージの生徒となります。しかし、これはすぐ廃校になり、同僚の浅井忠らとともに洋画の私塾を作ります。

しかし才能のあった正太郎は、その後、文部省の美術教育、古社寺保存方針などでことごとく覚

三と対決します。しかし、薩長閥の支持を受けた覚三はことごとく勝利します。では覚三は得意満面だったのでしょうか。『父・天心』は若い頃、覚三が悪夢にうなされた話を三つほど伝えていきます。その一つ、牛込筑土の凶宅の話は暗示的です。世をはかなんだ某旗本の愛妾が自害した家だったといえます。牛込筑土近辺はあの彰義隊発祥の地(円応寺)です。池の端の凶宅もまた彰義隊ゆかりの土地です。長州閥を通して狩野芳崖(長州、奇兵隊近辺の人物)に接近しながら、そしてまた正太郎の挑戦をはねつけながら、覚三は心の中で何を思い悩んでいたのか。そしてまたこの思い悩みを払拭できなければ、「美的ナショナリスト」として転成できなかったのではないかこれが私の報告の核心です。(この報告は石橋基金の援助を受けた調査の一部です。)

平成16年

◎2月25日

STENDHALの生活

藤原 裕

スタンダールの全集を一見すると、なんでも屋のように見え、長編小説、中・短編が、旅行記やパンフレット、自伝、哲学的エッセー、文学批評や音楽批評、絵画史のなかに混じっているが、このヴァリエティが主要な特徴で、かれの長所ではない。このなんでも屋が時には単なる剽窃であったこともある。けれどもそうした非難がスタンダールにあてはまるか？

彼は一見多面的な文筆家にみえるがその作品を読むとそうでないことが分かってくる。そのユニークな作品については、はっきりした線がみられ、彼自身がその立て役者であると分かる自伝とも見られて、まさしく作家と作品は一体を成している。

その作品のどのページにも特殊な色づけを与え

ているのはエゴティズムである。それは聖アウグスティヌスからJ-J.ルソーを経てシャトーブリアンに至る、自伝文学の大作家の線の上にかれは置かれている。かれのエゴティズムの形成は、その自伝的な作品群とその生涯に並んで作られている。『日記』『エゴティズムの回想』『アンリ・ブリュテールの生涯』はその3つの段階である。『日記』は18歳の時から始められ、日々の細かい記録から認識の手段を目的とするまで書かれているが、食物のことには触れないのに、衣服とか性生活については多くの記述がある。日記は自己を認識できる最高の手段だった。1811年5月27日には『活動的な軍隊に入るのは、人嫌いな自分にとってひとに会ったり交際したりせざるを得ないから、有益だ』とある。

ベイリスムの概念が現れた時、日記が書かれなくなった時と符合する。自己の細かい反省と探求に代わって、スタンダールはメモワールに書き止めて置こうとした事を簡単に記録するようになる。自己の根源の迷宮に踏み込まざるを得なくなって、自己を容赦なく分析する仕事から、単に事件を扱った情報に代わったのである。スタンダールの脳裏に青年時代から付きまとう真実の探求を彼が放棄することにわれらは直面したのであろうか。苦心の末の『日記』の放棄は、時間から小さな事実を奪って自分の生活を位置付け、未来でなく過去の中にしっかりと自己を再生しようと、日記のほかに自伝とか過去の喚起が続くようになったのだ。五十代になってかれは『エゴティズムの回想』という1821から30までのパリ生活を書き始める。

チビタヴェッキアなる領事の生活の町で死にたくないとか、ローマでの滞在が面白くないと言っていることを置いても、遺跡や墓で満ちた古代の都に、かれの精神が必要とする有益で刺激ある会話がなからなかった。

スタンダールの妹ポーリーヌに宛てた手紙に、ヴォルテールとルソーについて「かれらの全ての